

## 弱い自分

第 21 期生 山田 万由子

「ギリギリ人間」。これは、小野ゼミホームページの私の個人ページに記載されている、私のキャッチコピーである。やらなければならないことに手を付けるのが遅く後回し癖のある私は、ギリギリになってなんとかやり切るギリギリ人間である。このエッセイもそれを痛感しながら書き進めている。小野ゼミ生活で変わるかと思っていたが、そうではなかったらしい。一番直さなきやいけないところであったのに。

では、小野ゼミ生活で、何が変わったであろうか。ロジックを求めるようになったこと、夜中の 3 時では驚かなくなったこと、過酷な状況を楽しめるようになったこと、きっとたくさんあるが、私が特に思うのは、「自分の弱さに向き合えるようになったこと」である。弱さの正体は、勉学の能力だったり、計画の甘さだったり（ギリギリ...）、諦めなくなる気持ちだったり、無力感だったり。

私は、負けず嫌いであった。これまでそれなりにある程度のことをできるような人生を送ってきた私は、できないことを認めるのが嫌であったし、できないと言うのが嫌であったし、できないことに目を向けるのが嫌であった。慶應義塾大学に入学し、それはだんだん崩れてきていたが、明確に崩れたのが小野ゼミである。ディベートの第 1 回が終わったとき、「私が 1 番できない」と思った。悔しかった。同期の皆に嫉妬した。そこから私は、何度もできない自分に、自分の弱さに直面した。「自分の弱さに向き合えるようになったこと」を咀嚼してみると、「SOS を出せるようになったこと」があるように思う。できないことはできないと、分からないことは分からないと、そう言えるようになって、自分の弱さを受け止めて、成長できるようになった気がしている。

このように、できないことはできないと（流石に努力もしているが）、ある種のびのびと小野ゼミ生活を送ってきたわけであるが、紛れもなく心優しい同期第 21 期生のおかげである。女子は、息をつく間もなく話しているし、男子は、女子があーだこーだ言っているのを優しくうなずいてくれる。色んなところから集まった女子の皆の方言はうつってしまったし、皆のモノマネだってできる。休日に皆と会うと、小野ゼミの皆の話をしてしまうし、日常会話でマーケティング用語を使ってしまうのも、ただの文章の書式をチェックしてしまうのも、大好きである。私は本当に同期の皆が大好きである。好きすぎて最近では直接伝えているくらい。直接伝えてしまいたいと思うほど、皆は嫉妬するほど素晴らしい人である。ありきたりではあるが、皆と出会えたことが私の財産である。

最後になりますが、小野ゼミを通して出会った全ての皆さんに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

いつか読み返す私は、ギリギリ人間を脱して、誰かの SOS に応じられていますように。